

知られている我

詩篇139 篇1〜6節

主よ、あなたはわたしを探り、わたしを知りつくされました。(1)

本篇は、生ける神との人格的な関係について語る最高傑作の一つです。「あなた」「わたし」という表現が繰り返されるように、詩人と神との距離の近さ、親密さが特徴です。

6節までは、神が詩人の全てを知り尽くしておられる、すなわち神の全知について語られています。「主よ、あなたはわたしを探り、わたしを知りつくされました」。それは目に見える行動だけではありません。神は詩人の心の中の思いまで知っておられます。罪を持つ人間にとり、全てを知られてしまうことは恐ろしいことです。人はそれぞれ隠したい部分を持ち、他の人には知られたくない過去があつたりするからです。そのため人前では本当の自分を隠そうとします。他の人々から拒絶されることを恐れるのです。そして人は神の前でも自分を良く見せようと装います。「こんなダメなわたしでは、神も受け入れてくださらないに違いない」と考えるからです。けれどもこの詩人は、神は弱さや醜さを持ったこのわたしの全てを知つた上で受け入れてくださるというのです。詩人はそこに大きな喜びと平安を見出します。もはや神の前で自分を良く見せようとする必要はないからです。

わたしたちも全てを知っておられる神にありのままを差し出そうではありませんか。主の前に自らをさらけ出すことは恐ろしいことではなく、大きな平安を与えてくれるのです。